

---

# ホラ吹き甦らす

ニトログリセリン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ホラ吹き甦らす

### 【Zコード】

Z34760

### 【作者名】

二トログリセリン

### 【あらすじ】

町一番のホラ吹きとの恋い出。

「 ニウちゃんはなあ、パイプん股から生まれてきたんやでえ」

チタばあちゃんの発言で一番印象に残つていいものと聞かれれば、先ずこれが頭に浮かぶ。

ぼくの生まれた町は、じつちゃんが生まれるくらいから工場地帯だつたらしい。

埠に囲まれた広大な敷地内には黒い汚れのこびりついた建物づたいに、大きなパイプがうんとたくさんあった。

股のあるパイプもだ。

からからに干からびた細い指が、煙の上かる灰色の群へ向けられる。

チタばあちゃんは嘘つきだ。

それも、ぼくの住む町で一番のホラ吹きだ。

だからとつちゃんもじつちゃんも、みんなもみんな、チタばあちゃんの言つこと信じない。

もちろんそのとき、ぼくもチタばあちゃんの言葉は信じなかつたんだけども、あのパイプのぐねぐねを見ていると、なるほど、これだけあれば一つくらい人を生むパイプがあるかも知れないと、ぼくはひそかに思うのだ。

「 ぼくはどれから生まれたの？」

そう尋ねたのはただの興味だった。

けれどチタばあちゃんと同じくの間に、作業着を着たとつちゃんが駆け込んできた。

息の荒いまま、とつちゃんはまことに背を向けチタばあちゃんを怒鳴りつける。

「縁起でもない嘘をつくな！ ホラ吹きババア！」

しかしそんなことで怯むホラ吹きババアじゃない。  
とつちゃんに負けない声でチタばあちゃんががなる。

「本当のことだよ！」

「くたばれクソババア」

そのままでちやんに手を引かれたぼくは、とつちゃんにチタばあちゃんに近付くなつて散々怒られた。

ホラ吹きがうつうちまうととつちゃんはもつともうじく書いてた  
けど、理由はそれじゃないつて僕は思つてた。

素直に返事をしない僕に業を煮やしたとつちゃんは、学校以外家から出してくれなくなつた。

そういうしてゐうちに、チタばあちゃんは亡くなつたんだつた。  
最後に会つて一週間も経たない、夏の暑い日のことだつた。

葬儀は早かつたと思つ。

嘘つきのホラ吹きだつたけどどこか憎めないチタばあちゃんは、  
町中の人から花をもらつた。棺桶に収まつた身体のほとんどが花で埋まる。

真つ黒な服は窮屈だ。

ましてやじつとしてなきやいけないなんて最悪だ。

ぼくも、みんなも、蓋のされた箱を見ている。棺桶がゅつぐつと靈柩車へ運ばれていく。

いよいよ車に乗せようという時だ。

蓋がぱかっと開いて、死装束のチタばあちゃんが起き上がる。町のみんなが集まつた会場を見回し、いたずらが成功した子供みたいに「う」と笑う。

「まだ死んどらんがな」

葬式会場中が唖然となつて、一度引いた潮が浜へ押し返されてくるみたいにホラ吹きババアと騒ぎ出した。

みんなが頭を搔いたりもじもじして、隣の人と目を合わせる。まんまと騙されちまつたな。

ホラ吹きババアめ、泣いて損したよ。

……なんてことにはならなかつた。

チタばあちゃんは真つ白な顔で口を半開いたまま一回も喋りはしなかつた。

静かに靈柩車へうつされ、そのまま連れてかれた。

だから、あの時聞きそびれた答えは聞けずじまいだ。

八年ぶりに会う同級生たちはみんな大人びて見えた。

小学校を出て以来のやつ。中学校まで一緒だつたやつ。高校で県外へ出てつたままだつたやつ。

久しぶり過ぎたし、記憶の中よりぐんと成長してて一体誰が誰だかわからんない。

名前を言われてやつとわかつたやつもいたけど、名前を聞かされても、いまいちピンとこないやつもいた。思い出せずにいても、

「お前、相変わらずだなあ」

つて背中を叩かれながら言われるだけなんだから、僕はもとから  
そなんだろう。

よくぼーっとしてるとか言われてたし。

成り行きで行くことになつた同窓会ではちびちびとアルコールを  
舐めながら、何となく名前を知つている女子の隣で胡座を搔いてた。  
チタばあちゃんの話題が上がつたのは、小学校のとき色々馬鹿や  
つてたスキがまた馬鹿やつてテーブルからずり落ちたぐらいのと  
きだ。

「チタばあちゃんつっていたじゃない」

がやがやとどんちゃん騒ぎの傍らで、耳に拾つた固有名詞で僕は  
チタばあちゃんのついた猛烈な嘘を思い出したんだつた。

かつての同級生たちは口笛でウグイスの鳴き真似をされて騙され  
たとか、落ち葉の焼きあとを指差して焼き芋が入つてると騙された  
とか、些細な嘘を語りあつてゐる。

しゃがれ声と、工場へ伸ばされた指の情景が脳裏を過る。  
僕には母がない。

生物学上の母は地球のどこかにいるんだろうけど、一番最初の思  
い出を探つても、生活の中に大人の女性の影はなかつた。ずっと祖  
父と父と僕の三人暮らしだ。

端から見れば母のいない僕にチタばあちゃんがついた嘘はひどい  
もんだろう。

あのとき激怒した父の気持ちもよくわかる。

しかし公園の砂場で一人遊んでいた僕を、チタばあちゃんはから  
かいたかったわけではないんじゃないだろうか。

あの工場は昔も今も町の象徴で、生活の場だつた。

パイプが入り乱れて、煙突の先から白い煙を幾つも空へ伸ばしている。

僕が、母がいなくて寂しかったことを、チタばあちゃんは知っていたのだろう。

嘘をつくことで、不器用ながら僕も町の子供の一人なんだから、寂しがる必要はないんだって言おうとしてたんだと思う。

下手な慰めよりも嘘を選んだ優しさは、残念なことに誰にも伝わらなかつたんだけれど。

なんちゃつて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3476o/>

---

ホラ吹き甦らず

2011年10月5日19時46分発行